

論文

## アルタイ・オリアンハイ人はなぜアルタイ山脈を越えたのか？ ——1930年の「集団逃亡」について——

上村 明

### Why did Altai-Urianhai people go across the Altai Mountains to Xinjiang? – The “Mass Refugee Movement” in 1930 –

KAMIMURA Akira

#### Abstract

In June 1930, over 430 Altai-Urianhai families moved across the Altai Mountains to Xinjiang, China. This “escape” triggered a chain of cross-border movements going out of Mongolia, initially in the region of western Mongolia and then spreading all along the border areas close to China. Altai-Urianhai’s reports presented at the national congress meetings, as well as maps they produced and submitted to the governments, show that their territory had shrunk due to Kazakh domination of the region and unfavorable governmental policies. They stated that their motherland was the Chingel River to the west of the Altai Mountains, pleading for the government to return it to them. Furthermore, the government of the People’s Republic of Mongolia, which was undertaking nation-state building, had started to introduce the school-education system and the conscription system. The Altai-Urianhai people considered not only those systems but also the government to be those of “Halha’s”, “red”, and therefore “evil”. In this context, they did not “escape” from their motherland, but rather returned to their homeland. Those suffering in other areas of Mongolia took the incident to be an “escape from the motherland” or a “form of resistance” rather than a “return home”. In other words, they “de-contextualized” the incident from Altai-Urianhais’ historical contexts, and “re-contextualized” it into their own positions in the situation of that time. Thus developed the mass refugee movements in the early 1930s in Mongolia.

#### Keywords

Mass refugee movements, Borders, Nation building, Altai-Urianhais, Kazaks

## はじめに

1930年夏モンゴル西部の集団アルタイ・オリアンハイ人<sup>1</sup>が大挙してモンゴル側からアルタイ山脈を西に越え現在の中国新疆側に移動した。この出来事は、中国国境に接するほかの地方の中国領への大規模な越境行動を誘発し、モンゴル人民共和国における全国的な「集団逃亡」と反乱の時期の始まりを象徴する事件となった。本論文は、この出来事を取りあげ、当時のアルタイ・ホブド辺境をめぐる歴史状況、彼らの帰属意識のあり方、モンゴル人民政府に対する意識について論ずる。この出来事を取りあげることで、モンゴルにおける国民国家の形成過程、国境の形成の歴史的な動態を、辺境地域の人々の視点から解明しようとする。

アルタイ・オリアンハイ人は、現在主としてモンゴル国西部のホブド県とバヤンウルギー県、中国新疆省アルタイ地区に居住する人々である。その祖先は、18世紀半ばズーンガルに属していたが、乾隆20年（1755）前後に清朝に降り、同27年左翼4旗右翼3旗の計7旗に編成される（『清史稿』巻524）。清朝がオリアンハイ人を規定する要素のひとつは、生業に狩猟が一定の割合を占めることであつたらしく、彼らは清朝に毛皮税を納めていた（『科布多事宜』：27, 44, 52）。はじめオラーンゴムに牧地を割り当てられるが、貂が捕れないことを訴え、同24年アルタイ山脈の西、イルティッシュ河を中心とする地域に移された（『清史稿』巻524）。その出自は様々であり、現在でもトゥバ語を第1言語とする人たちとモンゴル語を第1言語とする人たちがいる（図3図4の説明参照）。しかしながら、モンゴル人民共和国の社会主義民族理論によって、彼らはチュルク系の「エスニック集団」とみなされ、社会主義国民国家建設過程における“Sub-nation”をカザフ人とともに構成する存在と位置づけられた<sup>2</sup>。その結果として、1940年「カザフ人とオリアンハイ人の願いにより」建設されたのが、バヤンウルギー県である（Камимүра 2013）。

1930年のこの出来事のような逃亡＝逃散は、牧畜民にとっては、自然・社会的条件を総合的に評価し、条件のよりよい場所に移動する、機会主義的移動のひとつの形態といってよい。農民が土地を失って流浪民となるのとはちがい、家畜をつれて移動する牧畜民にとってリスクも小さい。一方、政府にとっては反逆であり、裏切りとむすびつけられ語られてきた。しかし、清代には外モンゴルやホブド辺境においても大規模な逃散はみられなかった。ところが、1912年からは、中国とモンゴルとのあいだで帰属先がゆれうごき、アルタイ・オリアンハイでは、旗の領主が家族と数人をしたがえて中国領に逃亡することや、旗全体が中国に逃げまたモンゴル側にまいもどってくるということもあった。とはいえ、このような事件は散発的であつて、1930年のこの出来事にはじま

1 日本語で「ウリヤンハイ」「オリアンハイ」等、漢字で「烏梁海」などと書かれるが、ここではモンゴル国でのキリル文字表記“Урианхай”をカタカナ表記した「オリアンハイ」を用いる。

2 モンゴルの国家建設に影響のあつたブリアード人知識人ジャムツラーノは、当時の民族理論に影響され、アルタイ・オリアンハイ人をフブスグル湖とタグナ（現在のロシア連邦トゥバ共和国）のオリアンハイ人と同じ“ясган”つまりエスニック集団に属するとみなし、モンゴル語をしゃべるオリアンハイ人も元々トゥバ語使用者であつたことを示唆している（Zhamtsarano 1979 [1934] :111, 120）。

るような大規模な逃亡に発展し、全国的な反乱に連鎖するようなことはなかった。この点で、この出来事は特異であり、近現代のモンゴル史において転機となった事件といえる。

1930年前後のこの地域の歴史的情勢を語るアプローチとしては、モンゴル人民政府がこの地域に対してどのような边境政策や民族政策をとっていたか、さらに当時の世界情勢とソ連の首脳部の意向がどのように影響したかを記述することが考えられる。しかし、そのようないわば「大きな文脈」は、たしかにおおくの場合決定的な役割を果たし、地方情勢報告等をつうじてその地域のローカル文脈も織り込まれるだろうが、それ自身、一定の時間と空間で区切られ、数人の限られた人物が場する、非常にローカルな文脈である。一方で、世界史のダイナミクスと直接つながり、おおく場合密度の濃い史料が存在するという歴史的記述上の利点がある。それに対し本稿では、1930年のこのローカルな出来事に集約された、過去と未来とに連続する文脈をたどりながら、この地域の人々の声や行動から、歴史がどのように動いたかみようとす。ここでは、上にあげた「大きな文脈」は、交錯する様々な文脈のなかの、重要だが、あくまでそのひとつである。

本稿でとりあげる史料は、モンゴル国立文書館所蔵の国家小ホラル（議会）文書が中心となる。小ホラルは、大ホラルから選出された議員で構成される<sup>3</sup>。1924年の第1回から1928-29年の第5回大・小ホラルまで、各議員は地域や組織を代表して順番に報告をおこない、それについて討議するという形式で議事が進められた。また、地元にもどる小ホラル議員には、その地方の情勢を秘密裏に調べ、幹部会に報告する任務が与えられた。これらの報告は、たとえそれが中央政府向けの顔であったとしても、彼ら自身の声といえる。さらに、本稿では、アルタイ・オリアンハイ人がみずから作成し政府に提出した地図をつかう。地図に描き・書きこまれた場所や記述から、彼らの政府へのアピールを読みとることができる。それにくわえ、筆者が1990年代半ばにモンゴル国西部で行ったインタビューもとりあげる。この当時、実際にこの出来事を体験した人々が健在であった。

本論でとりあげる出来事は、過去に向かってはロシアにおける対カザフ人政策と彼らの移動、清朝西北边境の動乱と清朝の対策といったもろもろの歴史過程によってひきおこされた、その「反作用」であり、「多民族国家」としての現在のモンゴル国が形成される過程に連続してゆく。また、共同体を規定するのがその空間的境界と社会的境界（誰を成員とするか）であるならば、西部の国境問題とアルタイ・オリアンハイ人の帰属の問題は、当時のモンゴル人民共和国ならびに現在のモ

3 1924年新憲法制定時の第1回大ホラルでは、ハルハ4部、ドゥルブド、イフ・シャビ（旧ボグド・ハーン領民）、アルタイとフブスグルのオリアンハイ、カザフ、首都ウランバートル、ボグド・ハーン時代以降に帰属したブリアード旗、ダリガンガ、ホブド・タリアチン旗、人民軍からの代表者90名（実際に出席したのは77人）から、新憲法の規定にしたがい20名の小ホラル議員が選出された。ちなみに、アルタイ・オリアンハイからはテブゲト、カザフからはダレルハン（デレリカン）旗のT・ダウトバイが選ばれた。また小ホラル幹部会の定員は5名、第1回の小ホラルでは、首相B・ツェレンドルジ、人民党中央委員会委員長Ts・ダンバドルジ、D・ラムジャブ（書記長）、J・ダンガー、P・ゲンデンが選ばれ、ゲンデンが小ホラル議長に就いた（УБХ 2009: 6-8）。小ホラルは、極左偏向時代（1928-1932）に党中央委員会がすべての政治過程を指導するようになるまで、国家の最高意思決定機関であった（Мөн:3）。

アルタイ・オリアンハイ人はなぜアルタイ山脈を越えたのか？（上村）

ンゴル国の国家のあり方そのものを示すといえる。一方で、モンゴル国内でこの問題をあつかうことは、即カザフ人のモンゴルへの帰属やバヤンウルギー県創設の正当性の問題に直結し、カザフ人の排斥とそれに対する反発など、国民の統合性をゆるがすことにもなりかねない。それゆえ、この問題に関する史料の使用が制限されていることもあって、モンゴル国内で研究が進んでいるとはいえない。

本稿では、上述したような歴史的過程（文脈）とむすびつけながら、この出来事の概要、モンゴルでの社会主義と今日における評価、当時のモンゴル人民政府のアルタイ辺境に対する政策、アルタイ・オリアンハイ人の反応について明らかにし、この時代のこの地域における歴史動態とその一般性を明らかにしようとする。

## I. モンゴル（人民共和）国における 1930 年の出来事の記述とその評価

まず、モンゴル（人民共和）国において、この出来事についてどう記述され評価されてきたか述べる。上述のとおりこの出来事について述べた研究は少ない。社会主義時代の公定歴史書『モンゴル人民共和国史』第3巻（БНМАУТ, 1969: 289）は、「聖俗封建領主たちが、左翼偏向政策を利用し、国境地帯のウムヌゴビ、ドルノゴビ、ドルノドの各県、とくにアルタイ、ホブド国境の民衆を扇動し、遅れた意識の人々を国境の外に逃亡させたのである」と、階級闘争と左翼偏向政策の観点から簡単に記述しているのみである。また、Минис, Сарай（1960: 53）は、カザフ人の立場から「1930年（カザフ）シェルシ旗のザヒラグチ（統治者）であったダレルハン<sup>4</sup>、オリアンハイ旗のザヒラグチであったダー・ラマ・チュルテム<sup>5</sup>らがアルタイ山脈を越えた出来事は、カザフの領主、バイ、ビが一斉に逃亡する合図となった。…当初ホブドの地にいたカザフ人の80%以上が（新疆）アルタイに移った」と述べている。

この事件についての詳しい記述は、1990年代の市場経済化以降、出版物に登場するようになる。1991年、社会主義時代の社会公安庁の後身であり現在の情報総局（ТЕГ）の前身である国家公安総局（УАБХЕГ）は、自分たちの活動を正当化するために、『万人の眼から逃れられず』（Алтанхуяг et al. 1991）という小冊子を出版した。1990年代の初め、モンゴルの諜報機関は、存立の危機に直面したが、活動の歴史に大きな位置を占めていた30年代の反乱や「国外逃亡」を、従来のように

4 スキルバイ・ダレルハン（デレリカン・スグルバヨフ, Сүкірбайұлы Дәлелхан, 1906-1949）。東トルキスタン共和国の指導者のひとり。現在のモンゴル国バヤンウルギー県ツェンゲル郡生まれ。1922年シェルシ旗のザヒラグチに選出される。1928-1929年の第5回国家大ホラル及び小ホラル議員（Султан, Зулькафиль 2010: 240-241）。

5 サンボー・チュルテム（sambuу čültem, 1886-1939?）。右翼大臣旗の総管バルダンドルジの弟、旗の寺院のダー・ラマを務めていたが、1916年兄の死後その子ジャミヤンジャブが継ぐと、若年の甥のかわりに旗と右翼を管理した。1920年ジャルハンズ・ホトグトに従って北京に行く。1927年から国家大ホラル及び小ホラル議員。1927年7旗が左翼旗、右翼旗の2旗に再編されると、右翼旗長に選出された（Камимұра 2015a）。

反革命行為ではなく、「母国への反逆」ととらえなおすことによって組織の存続をはかったのである。後述するように、30年代前半の反乱や「国外逃亡」を「母国への反逆」と評価することは、明らかに誤りであるが、そこで使われている史料は、現在でもモンゴルの公安部門所属の研究者に利用が限られているために貴重である。

同書には、当時の国家公安総局附属研究所の研究者アルタンホヤグ大佐が、1930年代初めに起きた一連の中国への「集団逃亡」をテーマに、ひとつの章を書いている。彼は「1930年、オリアンハイ旗のザヒラグチ、ダー・ラマ・チュルテムの率いる人々が、新しい地方行政組織がつかられていないこと、モンゴルの国境が守備されていないことを利用し、アルタイ（山脈）を越えた。このことは、モンゴルにいる封建領主や僧らが、味方に引き入れた民衆をモンゴルの国境の外へと逃亡させる始まりとなった」と、この出来事に対するそれまでの評価を踏襲し、つづけて「オリアンハイ旗ダブスト・ノール・ソムの人々は、噂や強制によって、1930年5月12日集団で国境にちかいトゥルゲンという場所に突如移動してきていたが、人々の間に『6月22・3日に国境のむこうから300人のカザフ兵がボルガン河に侵攻してきて撃ちあいになった』という噂がながれ、それが国外への逃亡につよく影響した」と、旧社会公安庁文書館の史料を引用している（Алтанхуяг 1991: 86-87）。2012年には、同じ研究所に属するアビルメド氏も「集団逃亡」についてのモノグラフ（Авирмэд 2012）を出版している。

このふたつの研究の情報は、ほとんど重なる。それによると、1930年6月、現在のバヤンウルギー県ボルガン郡の地にいたアルタイ・オリアンハイ旧右翼大臣旗の430戸以上がアルタイ山脈を越え、モンゴルから新疆アルタイに「逃亡」した。それがきっかけとなって、ほかのアルタイ・オリアンハイ旗からもアルタイ山脈を越えるものが続出し、アルタイ・オリアンハイ全体で1,106戸3,300人、さらには隣接するトルゴード約300戸、ザハチン228戸670人、カザフ2,430戸9,110人がアルタイ山脈を越えた。モンゴル西部辺境全体では、1930-31年だけで、5,170戸、15,510人がアルタイ山脈を越えたのである（Алтанхуяг 1991: 87; Авирмэд 2012: 47）。

1930年最初にアルタイ山脈を越えた旧右翼大臣旗の人々の一部は、のこった同旗の人々を新疆に連れて行こうと再び国境にもどってきた。その数は、同旗の人たちとカザフ人をあわせ約100人であった。しかし、モンゴル側の国境警備隊が応戦し、国境を通過することはできなかった。翌1931年5月、ふたたび武装した約200人がハルザン峠でモンゴル国境警備隊と衝突し、今度は国境を突破し、現在のホブド県ムフハイルハン郡、ドート郡に侵入し、のこっていた同旗の人々を新疆側に連れて行った。彼らは、新疆側の国境警備隊の支援をうけていたという<sup>6</sup>。

ホブド県ドート郡で1995年11月25日、私が聞き取りをしたメンドバヤル氏（1919-1997）も、その時（1931年春）アルタイ山脈を越えたひとりである。彼は、おなじ年の秋にモンゴル側にも

6 Авирмэд (2012: 47) は「ツェガールに駐留していた新疆のアルタイ国境を警備するホイホイ（回回）マー・ダイラン隊長の指揮する中国軍の直接の参加のもとに」とする。マー・ダイランというのは、姓名ではなく「馬大人」であり、新疆政府配下の漢人ムスリムを指すのであろう。メンドバヤル氏も「マーダーレンがわれわれを迎えた」と語った。この地方で上の世代がホイホイに徴兵されて従軍したと語る者もおおい。

アルタイ・オリアンハイ人はなぜアルタイ山脈を越えたのか？（上村）

どった。

情報機関所属のふたりの研究者は、この出来事の原因について、第一に上述した当時の極左偏向による旧支配階級に対する急進的政策のあやまりをあげ、「1930-1932年、母国から逃亡する動きが活発化したのには、当時の極左偏向政策が影響しているが、なかでも最大の理由は、聖俗封建領主との闘争をあやまったこと、特権を剥奪された封建領主が悪影響をおよぼしたことはあきらかである」（Алтанхуяг 1991: 93）、「一部の意識のおくれた民衆と、財産を没収され、官位を剥奪された僧、領主らが母国から逃亡し、あるいは反乱を起こそうとしたことは、国内情勢を非常に悪化させた」（Авирмэд 2012: 7）と述べる。これは、最も一般的な「逃亡」の理由の説明であり、ホブド県ドート郡のドノロブ氏も、インタビュー（1995年12月9日）でつぎのように答えている。「人民革命は24年にきた、この西の辺境に。人民革命がきて若者を軍隊にとる。子供たちは学校に入れる。寺にはいって僧となるのを禁じた。僧や領主を聖俗封建領主として弾圧した。これを民衆はきらい…（新疆に）行った」。彼は、1917年チンゲル生まれ、1930年僧としてアルタイ山脈を越え、1934年モンゴル側に帰還し、還俗して党の宣伝員（зарлага）としてはたらき、市場経済化以降ふたたび僧となった。

「商品の飢餓」も「逃亡」の大きな原因となった（Алтанхуяг 1991: 85）。それまで人々が依存していた漢人商人たちを排除した結果、じゅうぶんな質と量の商品が供給できなくなったのである。コミンテルンも、ホブド地方での商品供給の欠陥を重大視し<sup>7</sup>、商品不足と国外逃亡との関連を認めて<sup>8</sup>、モンゴル党・政府の商業政策が国情にあわなかったことを指摘している<sup>9</sup>。ただし、この「商品の飢餓」という状況は、新疆もあまり変わりがなかった。

地方の実情を無視した強引な税の徴収への不満、さらに噂も、新疆アルタイへの脱出の原因となった（Алтанхуяг 1991: 85）。当時の噂について、前出のインタビューで、メンドバヤル氏は、「うちは、私が13歳の時、わが旗は『赤』から離れるとって、これはどういう言葉かという、うちの方では『角なし』と言っていた。この『角なし』主義から離れるとて、『幼い子どもを学校にいれるとって毒蛇の餌にする。若者を軍隊にいれると連れて行き赤いロシアに殺させる』と言っていた。ここにいてはいけない。西の新疆によい土地がある。子供たちを連れてそこに行き暮らそうと、モンゴルの領主たちが人々に宣伝していた」と語っている。「角なし」（мухар）とは、辮髪を切ったハルハ人を指す。当時のアルタイ・オリアンハイ人は、辮髪を家畜の角にみたて断髪のハルハ人をこう呼んだのである。

また、バヤンウルギー県ボルガン郡で1996年6月28日聞き取り調査をした僧チュルテム氏（1923-?）は「ダー・ラマ（チュルテム）がホラルに行ってきた、60人の子供たちを学校にいれる

7 КБМ: 369: no.69, Коминтерн 執行委 東方書記局からモンゴル人民革命党中央委小会議への書簡（1930.12.8）； Мөн 372: no.70, Монゴルにおけるコミンテルン 執行委代表 Б.М.Черномордик の書簡（1931.6.14）。

8 Мөн:376: no.71, Черномордик 書簡（1931.8.21）。

9 Мөн:379: no.72, Черномордик 書簡（1931.9.18）； Мөн 395: no.77, Коминтерн 執行委・全連邦共産党中央委員会のモンゴル問題に関する決議（1932.5.29）。

と言ったことで、毒蛇の餌にするという噂がたった」と述べている<sup>10</sup>。

アルタイ山脈を越えた人々は、しかしながら、新疆にながく滞在することはできなかった。ほとんどが1934年までにモンゴル側にもどってきている。その数は、戸数で88%、人数で90%以上であった(Алтанхуяг 1991: 109; Авирмэд 2012: 122)。このような結果になった背景には、新疆内の政情不安—金樹仁(1928-33)への不満によるムスリムの反乱の再燃、馬仲英の新疆侵入、盛世才の新疆実権掌握(1933-44)—があったであろう。また、1931・32年と連続して新疆アルタイで起こった雪害や、カザフ人らによる家畜の窃盗・強奪によって家畜をうしない困窮化したこと、さらには、新疆アルタイ側にあったオリアンハイ人の牧地を新疆所属のカザフ人が占拠して牧地が不足していたこと、そのうえ、元々アルタイの東のモンゴル側にいたオリアンハイ人も新疆にきたので、牧地不足は一層深刻になっていたこともあげられる(ドノロブ氏インタビュー)。

決定的だったのが1934年にカザフ人盗賊団がモンゴル国に侵入し、それをモンゴル軍が新疆まで追撃し掃討したことである。「7-9月ホブド県のボルガン、ウエンチ、ダルビ、ツェツェグなどの郡、とくにボルガン河流域、パイタグ・ボグド山区域にいた500人にのぼる武装した盗賊団が、20数回にわたり、モンゴル人民共和国の国境内50-100キロまで侵入した。…500名近くの軍隊を派遣し、…850名以上を殺し、この地方の人たちから奪われた23,000頭を越える家畜をとりもどし、残党を国境外に追いはらった」(Баггулга 1991: 136)。カザフ人盗賊団掃討作戦には、デミド將軍が総司令官に任じられ、空軍のR-5偵察爆撃機4機も参加した(Алтанхуяг 1991: 104; Авирмэд 2012: 122)。モンゴル軍が新疆内にまで追撃して掃討作戦を遂行し、それを盛世才が了承していたことは、ちょうど新疆にいたヘディン(1984: 99)も記録している。ドノロブ氏ら新疆にのこっていたオリアンハイ人のほとんどは、1934年10月にモンゴル軍とともに再びアルタイ山脈を越えモンゴル側にもどった。

モンゴル側が「盗賊団」とよぶこの集団は、松原(2011: 28)で1933年の出来事として語られている「チンギル側からモンゴルに越境した約五〇〇テントのカザフ人集団」であろう。それによると、モンゴルのホブド県にまで移動した目的は、雪害による被害の拡大をさけるためだった。この地域の積雪量は東に山脈を越えるほど少なく、現在でもバヤンウルギー県の牧畜民が冬季小家畜をホブド県側に移動させることはめずらしくない。このような移動はもちろん、掠奪行為ですら、牧畜民にとっては生業の一部であっただろう。しかし、国境が整備され近代国家のかたちができるに当たって、以前にもまして国家にとって大きな問題となった。そもそも、カザフ人は、力関係においてオリアンハイ人やその地域のほかのモンゴル人に対して優位だった。とくに、ハルハ人が清からの独立を宣言したのを嫌った楊増新が武器をモンゴル人からは没収しカザフ人には供給する政策をとったので、その優位は盛世才がカザフ人から武器を没収する1940年まで圧倒的だった。このような状況に乗じてカザフ人は、ほしいままにアルタイ辺境で掠奪を行なった(Benson and Svanberg

10 1928年6月6日、チュルテム・ダー・ラマは、旗に小学校を開校したことを小ホルル会議で報告している(УТА 11-1-159: 122)。

アルタイ・オリアンハイ人はなぜアルタイ山脈を越えたのか？（上村）

1998: 62)。松原（前掲書：28）は、モンゴル空軍によるチンゲルへの攻撃によって、カザフ人の大移動の波が直接的にひきおこされたとする。

モンゴル政府は、新疆から帰還してくる人々の罪を問わず国境を通過させ（Алтанхуяг 1991: 107）、貧しいものには家畜や牧地をあたえ（Авирмэд 2012: 87）、税を免除した。ドノロブ氏によれば、「（ハルハ河戦争の年）39年になって徴兵がはじまり<sup>11</sup>、本当の行政がはじまった。それ以前は少数ヤスタン（エスニック集団）として特別視され、徴兵もなく、（子どもを）学校へも行かせなかった。家畜税もとらなかつたし、頭数も数えなかつた」。

この出来事が起きた直後、1930年7月10日にモンゴル国内の少数民族・エスニック集団問題を管轄する「少数民族評議会」<sup>12</sup>が小ホラルに付属する組織として設立され、書記長にアルタイ・オリアンハイ旧左翼大臣旗出身のソラフバヤル<sup>13</sup>が就任した。この「少数民族」には、ブリアード、ダリガンガなどもふくまれていたが、評議会の活動の中心となったのは、西モンゴル辺境住民の問題である。

モンゴルの研究者たちが述べているように、この出来事が「きっかけ」となって、モンゴルから中国に越境する動きは、モンゴル西部辺境にとどまらず、モンゴル南・南東・東部にもひろがり、モンゴル全体で1930年から1934年に中国側に越境した人数は、中国に国境を接する約10の県の9,800戸41,200人に達した（Авирмэд 2012: 127）。1935年6月1日の国勢調査によるモンゴル人民共和国の人口は、73万8,200人であったから、人口の約5%が国外に脱出したことになる。また、中国国境から遠い国土の4分の1を占める県では反乱が起こった。この出来事の兆候として、1930年3月に現在のオブス県のトゥグスボヤント、オラーンゴム両寺院で反乱が起こっている。しかし、追従者をすぐさま大量に生んだという点で、1930年アルタイ・オリアンハイ人がアルタイ山脈を越えたこの出来事が、モンゴルにおける「逃散と反乱の時代」の引き金となったのである。

---

11 1939年5月5日チョイバルサンは、それまで徴兵されることのなかつたオブス・ホブド両県も含む、全国からの徴兵を命じた（ХГД 1999: 368）。

12 少数民族の政治・経済・文化的利益の保護を目的として設立され（УТА 11-1-228）、1932年7月1日廃止される（Болдбаатар 2009: 253）。この評議会設置の小ホラル決議には、コミンテルンが作成したであろうロシア語の「小ホラル幹部会附属民族問題協議会の設置に関する小ホラル決議」という書類が添付されている。小ホラル決議の文章は、それをもとに作成されたと考えられる。評議会の名称には、当初ロシア語原案の“Совет по делам национальностей”の直訳である“*ündüsü ууһаһан-у yabudal-un jöblel*”が用いられ、“*малый национальность*”は、“*bay-a bayurai ündüsiten*”と訳されていた。しかし、すぐに“*bay-a yasutan*”という用語がつくられ、評議会の名称は、“*bay-a yasutan-u jöblel*”とされた。以降、“*yasutan*”は、“*национальность*”、“*народность*”に対応するモンゴル語として用いられるようになる。ただし、80年代からは、“*ethnic group*”のロシア語訳“*этническая группа*”に対応する用語として用いられるようになった（ex. Бадамхаган 1982）。

13 タムジド・ソラフバヤル（*tamjid suraqubayar*）は、1880年アルタイ・オリアンハイ左翼大臣旗生まれ。1927年より小ホラル議員に選出され、1928-1931年内務大臣、1930年から少数民族評議会書記長、1932年からは小ホラル書記長を務める。1939年粛清され没。若いころ漢人商館で働き、左翼大臣旗の書記を務め、カザフ人と働いた経験をもち、中国語、カザフ語、モンゴル文字に堪能だった（УТА 11-1-273）。

## II. アルタイ・オリアンハイの歴史的背景

上で述べたとおり、当時の急進的政策、商品不足など国外脱出の理由となる状況は、全国的なものだったが、なぜアルタイ・オリアンハイ人、とくに旧右翼大臣旗の人々がまずアルタイ山脈を越えて「逃亡」したのであろうか？それを考えるには、彼ら固有の歴史的背景を考慮にいれなければならない。

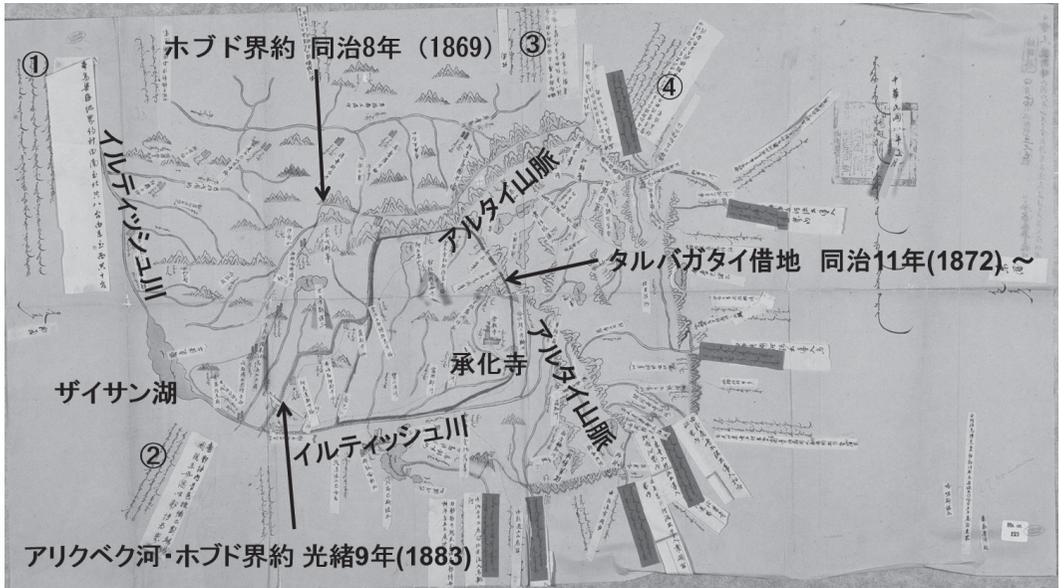


図1 『烏梁海左右翼七旗地圖』 民国8年12月(1919) ドイツ・ベルリン州立図書館蔵  
 ([http://crossasia.org/digital/mongolische-karten/index/imgview/img/SBB-IIIE\\_Hs\\_or\\_0123](http://crossasia.org/digital/mongolische-karten/index/imgview/img/SBB-IIIE_Hs_or_0123))

図1は、民国8年12月(1919)に作成されたアルタイ・オリアンハイの地図『烏梁海左右翼七旗地圖』である。右翼大臣旗の印が押されていることから、この地図は右翼大臣旗で作成されたことがわかる。1919年6月 アルタイ区が新疆省に編入され、1919年11月には 中国軍がフレー(現在のウランバートル)を占領、モンゴルの自治が解消された。その直後に中華民国政府に提出された地図である。

これをみると、西はザイサン湖から、東は現在のモンゴル国バヤンウルギー県とホブド県ドート、ムンフハイルハン郡とボヤント郡の一部、北はブケドゥルメン(布克圖爾瑪)河から南はイルティッシュ河、ウルング河までの広大な土地が、アルタイ・オリアンハイ人の牧地として描かれている。その広さについて地図の左上につきのような記述がある。「査するに、わがオリアンハイに土地の大きさがどれぐらいかその数を知っている人間はいない。ただ、駅にして計算するならば、南のオランボームから北のホブド河にソゴグ河が合流する合流点まで全8駅になる。また東のハルガイト河とオリアス河の合流点から、西のサス国境警備所(カルン)まで全12駅である」(図1①)

アルタイ・オリアンハイ人はなぜアルタイ山脈を越えたのか？（上村）

と記されている。地図の中心には、承化寺<sup>14</sup>（シャルスム，現在の阿勒泰市）が描かれ，当時の宗教的世界観を反映している。

注目すべきは，2本の赤線で，中口間の国境条約によってロシアに割譲された土地を示していることである。地図左下には，「査するに，オボーのうち青く塗ったものはすべてロシアに割譲したもの，塗っていないものは現在の2国間の国境のオボーである」（図1②）と説明書きがあり，地図の上中に「このハトリー峠からマーニト渡し（マニトガタルガン）の国境警備所まで，以前の同治8年（1869）ホブド参贊大臣クィ<sup>15</sup>がロシアの役人と一緒になって分けることを決め，国境線を引いた」（図1③）と，同治8年（1869）のホブド界約（Цэдэн-Иш 2003; 『中俄界記』3a頁）について述べ，その右には「このゼス峠からアラグベグ国境警備所までロシアと国境を接している。光緒9年（1883）イリ参贊大臣シャン<sup>16</sup>とホブド幫辦大臣エ<sup>17</sup>，ロシアの大臣バ<sup>18</sup>が一緒になって，あらたに定め，国境を引いた」（図1④）と，アrikベク河・ホブド界約（『中俄界記』3a頁）について述べている。ことさらに，以前の土地全体を描き，赤線で新しい国境線を示して，上のような注釈を書き入れることで，自分たちの関知しないところで土地が割譲された不満を民国政府に対して表明しているのである（Камимүра 2015b）。また，「一緒になって」と訳した“neilju”は，「共謀して」ともとれる言葉であり，非難のニュアンスも含んでいる。

一方，青線で囲われた土地は，タルバガタイがホブドから借地し，流入するカザフ人を活仏ゴンガージャルサンに統治させた土地である（李 1991; 張，王 2002; 吐娜 1990）。ゴンガージャルサン（棍噶扎勒参）<sup>19</sup>は，同治4年（1886）ムスリム反乱にあたってタルバガタイのウールド兵を率いて闘い功をたて，同治帝から金印を賜給され「ホトグト」に封じられた。以来，タルバガタイのモンゴル人たちは，彼を「ツァーガン・ゲゲーン」（白活佛）と尊称するようになる。同治11年（1872）アルタイ・オリアンハイの土地であるアルタイ山脈からハバ河にいたる周囲700里の土地を託され，現在のアルタイ市に承化寺を建立し800人の僧衆と住んだ（吐娜 1990: 397）。説明書きはないが，地図上に青線で囲まれた領域は，ちょうどこの土地にあたる。借地にあたって，オリアンハイ左右翼旗の了承を受けたとされるが（吐娜 1990: 397），彼らが拒絶することは実際にはできず，ほとんど強制であったことは容易に想像できる。青線で囲ってその土地を示し，中口界約の国境線の赤線とおなじく，自分たちの不満を中国政府に対して表明したといえる。アルタイ・オリアンハイ人は，

14 承化寺とも書かれる。この地図では，「承」chengの字が「崇」chongに置き換えられている。モンゴル語では，“soyol-i erkelegsen süm”。

15 奎昌。同治5-10年ホブド参贊大臣，同10年一時オリアスタイ將軍の職を代行。『清代職官年表』3-2390。

16 升泰。『清史稿』卷453列傳二百四十，12589頁。

17 額爾慶額。『清史稿』卷454，12625頁。

18 Иван Федорович Бабков(1827-1905)。1869年のホブド界約協議でロシアの筆頭代表に任命され協議を行った。その当時，少将，西シベリア軍区副参謀長であった。1883年のアrikベク河・ホブド界約協議では，中将，オムスク軍区参謀長であった（<http://regiment.ru/bio/B/10.htm>（2015.5.10閲覧））。Бабков（1912）参照。

19 原籍は，甘肅洮州。ラブラン寺で修業を積み，同治元年（1862）に新疆にやってくる（吐娜 1990: 394）。

侵入してきたカザフ人を駆逐する役割<sup>20</sup>から、カザフ人を受け入れる役割を期待されるようになったのである。

19世紀以降、ロシアの圧迫から逃れたカザフ人は、清朝の領土に流入し、道光2年(1822)のオリアスタイ將軍による報告では、アルタイ・オリアンハイの土地に潜入し居住するカザフ人は、数千戸にのぼった。それは、当時のアルタイ・オリアンハイ7旗全体の戸に匹敵した。この事態は、カザフ人とアルタイ・オリアンハイ人の間に深刻な紛争を引き起こしたので、道光帝は、道光2年(1822)から同19年(1839)まで数次にわたりアルタイ地方に軍を送り、これらカザフ人を駆逐した。また、この問題を処理するホブド参贊大臣を補佐するため、道光18年(1838)、クーロン幫辦大臣をホブドに移し、ホブド幫辦大臣とした(李1991: 122-123)。さらに、毎年春秋、ホブド参贊大臣と幫辦大臣が、ホニマイラフとマニトガタルガンの両カルンを巡回したのち、おなじくカルンを巡回するタルバガタイの大臣と合流しカザフ人を巡查することになった。巡回の際、税として馬をカザフ人から徴収した。その頻度は道光23年(1843)に隔年1回となったものの、大臣巡辺制度として確立し、20年以上大規模なカザフ人の流入はなかった(白2010: 43-44; cf. 佐口1986: 394-416)。

しかし、同治年間になると状況が一転する。同治3年(1864)のタルバガタイ条約以降、清朝領から新たにロシア領になった土地にいたカザフ人は、国境を越えて中国領の良好な冬営地を求めて集団で移動してきた(張, 王2002: 29)。同4年(1865)、イリ・タルバガタイにムスリム反乱がおこると、兵站のためアルタイ台站が設けられるとともに、タルバガタイの陥落後、大量の漢人、モンゴル人、カザフ人の難民がブルントホイに避難してくる。同治5年2月(1866)、ゴンガージャルサンも、敗走の途中助けられたカザフ・ケレイ部公アジ(阿吉)とともに、チンゲルに設営した(吐娜1990: 395)。同5年5月(1866)、ウールド兵やソロン兵もそこに集結する<sup>21</sup>。同治6年(1867)清朝は、タルバガタイ参贊大臣職を代行する李雲麟の奏請により、これらの兵と牧畜民、さらに屯田を管理するため、ブルントホイ辦事大臣と幫辦大臣を新設し、彼に辦事大臣を兼務させ、幫辦大臣にホブド幫辦大臣明瑤を移動させた。しかし、翌同治7年ブルントホイの漢人農民の反乱が起こり、ほとんど機能することなく、両大臣職は同治8年に廃止され、この地域はまたホブド参贊大臣の管轄にもどった(李1991: 129)。ゴンガージャルサンは、このブルントホイの反乱を鎮圧し、同治10年(1871)、現在のアルタイ市に僧院の建設をはじめ、同治帝より「承化寺」の寺名を賜り、光緒元年完成した(吐娜1990: 397)。

同治11年(1872)、タルバガタイ参贊大臣らは、流入してきたカザフ人を、ホブドから借地したハバ河以東の土地に集め、ゴンガージャルサンに治めさせた。ゴンガージャルサンは、カザフ人を

20 例えば、『清史稿』巻524に、道光18年12月(1839)、潜入してきたカザフ人を駆逐したとして、副都統ツェベグダシ等に花翎が与えられたとある。

21 Zhamtsarano(1979[1934]: 123)は、ゴンガージャルサンがアルタイ・オリアンハイ人から男女を問わず徴兵し、彼の率いるバルラグ(巴爾魯克:タルバガタイ南西部の山名)の十ソムのウールド人がいかに搾取したか、人々の語り草になっていると記している。

アルタイ・オリアンハイ人はなぜアルタイ山脈を越えたのか？（上村）

苛酷に扱ったので、多数のカザフ人がホブド方面に逃散し、アルタイ・オリアンハイのほかの土地にも居住するようになった（張，王 2002: 27）。光緒 15 年（1889），ゴンガージャルサンは，承化寺からタルバガタイに属するハルオスにもどったが，借地は返還されず，タルバガタイの管理のもとにのこった。光緒 29 年に返還がきまったが，「人随地轉」の原則によって，この地のすべてのタルバガタイ所属のカザフ人は，ホブドに帰属することになった。この地方を管理するため，翌光緒 30 年（1904），ホブド幫辦大臣を事実上廃し，ホブド辦事大臣を新設し，錫恒を任命して，シャルスムに移した。そして，錫恒の奏請により，光緒 32 年 12 月（1907），正式にアルタイ地方は，ホブド辺境から分治され，アルタイ・オリアンハイ 7 旗，新トルゴード 2 旗，新ホショード 1 旗の計 10 旗，およびブルントホイ屯田兵とカザフ部を管轄することになる（李 1991: 125）。

アルタイ分治には，ホブドとタルバガタイ両方の大臣らの，厄介なカザフ人をアルタイ辺境に「安插」しようという意図があった（張，王 2002）。錫恒は，上述の奏請でこの地域の情勢を，アルタイ・オリアンハイ人が，カザフ人と立場が主客逆転し，その土地の大半を奪われ，横暴や掠奪が日常になっていると報告している（李 1991: 135）。図 4 のように，アルタイ・オリアンハイ人は，右翼大臣旗のチンゲル河等をのぞいてアルタイ山脈の東側に押し込められたのである。

### Ⅲ. 彼らの声：第 1 回 国家大ホラルでの（書面による）報告

前章では，彼らの作成した地図を読み解くことから始めて，新疆側のアルタイの地とアルタイ・オリアンハイ人の関係を明らかにした。ここでは，下に引用した 1924 年の第 1 回国家大ホラルでの書面による右翼大臣旗の報告をとりあげ，そこに述べられている歴史的な文脈をたどっていく。第 1 回の国家大ホラルには，右翼大臣旗は，おそらく旅費が調達できずに，代表者を送れず，自分たちの旗の状況について書面で，つぎのような報告をおこなった。

アルタイ・オリアンハイ部ダルハン貝子旗のすべての民より，  
わが旗の大部分とこの部の半分の民は，西方のアルタイにあるチンゲル，ウルング，ケレン，イルティッシュ，ハバ，ハナス，エルベク，ビジク河等，おおくの畑，草刈り場，森林，果物，飼料，狩猟動物など，資源に恵まれた土地に，200 年以上にわたって住みなれ，恵まれた資源や狩猟動物にたよって生活してきました。清朝時代に黒いカザフが流入してきたのを皇帝の命によりわれらの土地に収容し住ませ，毎年牧草地の賃料として，ラクダ，ウマ，ウシ，ヒツジ，それぞれ 100 頭に対して 1 頭を徴収し，またカザフ人が耕作する場合は耕地の賃料を別途適宜徴収し，貧しきをくづけ，税を納めながら，土地の滋養にたよって暮らしを営み，職を継承し，年月を重ねてきました。しかし，清が滅亡しわがモンゴル人が独立した国家を建設したので，みずからの宗教（*šajin ündüsü*）と出自（*oboy ijayur*）を重視し，故地とともに（*nutuy ündüsü-ber*），帰順を願っていたところ，共戴 3 年（1913），200 を越える兵が，ウルング，チンゲル，チャンハンなどにいたわが旗の人々を印（タムガ）とともに移動させたのでそれにし

たがい、われらが土地のボルガン、デルーン、センケルなどに移り住みましたが、ここには畑も草刈り場も、果物も飼料もなく、森林や牧草地、冬营地、狩猟動物などがとてもすくなくて困り、この旗の民は毎年トルゴードの土地であるシャルホルスン等の場所に移動して冬をすごします。またチンゲル河等の場所に少数の戸が行って家畜を放牧し、すこしばかりの猟と耕作をしてもちかえります。14年(1924)まで、かの土地に住むカザフ人から牧草地と耕地の賃料を以前のとおり徴収していました。最近になってからは、カザフ人たちは土地・耕地の賃料を払わないだけでなく、管下のオリアンハイとカザフはもうふたつの国に分かれて従うようになったのだから、この土地(チンゲル河等)は中国管轄の土地であるので、狩猟もさせない、耕作もさせないと言って力に訴える上に、窃盗・強盗等により困窮に陥れられ、貧しき一旗の民は生計を立てるのが困難になっています。このままの状態、かの土地すべてを外国に奪われれば、民に示しがつかなく(yerü kümüjiki arı-a ügei)、そのみならず、われらオリアンハイの土地の西北辺境は、ロシアと境を接し広大で大地の資源が非常にあるのに、すべて中国(漢人)とカザフの者どもが占拠し利用しているということを報告し、この豊かな土地を(モンゴルの)領土として守り、貧しいオリアンハイの数旗の民をお導きくださり、故地をすべて取りもどせますよう、お力添え下さることを切に願います。(YTA 266-1-1)

報告は、まずアルタイの新疆側の土地の豊かさについて述べ、最後にその土地を取りもどして欲しいと請願している。また、新疆アルタイのチンゲル河などからモンゴル側に移動した経緯を、「共戴3年(1913)、200を越える兵が…移動させた」と説明している。さらに、カザフ人から牧草地・耕地の賃料を徴収していたこと<sup>22</sup>、1924年からは革命が彼らの地にやってきて払われなくなったこと、チンゲル等が中国領になり狩猟も耕作もできなくなったことを訴えている。

新疆側のアルタイにいたアルタイ・オリアンハイ右翼大臣旗をモンゴル側に移動させたのは、西辺境平定補佐(barayun kijayar-i toqoniylqu kereg-i qabsuran tusalayçi)台吉バヤルの兵であった。それについて、彼が内務省に宛てた共戴3年9月5日(1913)付けの文書(YTA A3-1-444:12)には、「われらの旗を乱暴なカザフ人が強奪し困窮化させて苦しめるなどおおくの事情を話して、われわれを保護してくれと要請したので、国庫とトルゴード貝子・公、ホショード公の3つの旗から100頭以上のラクダを徴用し、公バルダンドルジ所属の僧俗の民すべてを移動させ、ボルガン河に住まわした」とある。この文書では、要請があつて移動させたとなっているが、上述の第1回国家大ホラル報告をみると、保護を要請したのであつて移動を要請したのではないと理解できる。移動の手段は彼らにもあつたはずだから、なかば強制的に移動させられたと考えてよい。あるいは、移動は一時的と考えていたのである。

これを裏づける史料が、共戴3年10月25日(1913)のアルタイ・オリアンハイ7旗の地図である。図1の地図とは、構図も「アルタイ・オリアンハイを統治する右翼総管」という印が押されている

22 光緒18年(1892)タルバガタイとホブドの間で借地を3年延長した際、オリアンハイ人が困窮しているので、タルバガタイ所属のカザフ人に家畜で賃料を払わせると取り決めている(李1991:125)。

点も共通しているが、こちらの地図はモンゴル政府に提出された。その一部を拡大した図2をみると、チンゲル河周辺の墳墓、僧院、耕作地などが記載されている。これらは、図1の地図にも他のアルタイ・オリアンハイ7旗の地図にもない、この地図だけの特徴である。さらに、この図2の地図の日付は、前述の台吉バヤルの書簡の日付共戴3年9月5日より50日ほど後であり、右翼大臣旗が新疆チンゲルからボルガン河に移されてからまもなく作成されたことがわかる。

1911年辛亥革命がおこり、ボグド・ハーンがモンゴル国の独立を宣言すると、アルタイ・オリアンハイ右翼大臣旗を統治するバルダンドルジは、ホブド辺境に影響力のあるジャルハンズ・ホトグトの勧誘をうけて、翌共戴2年6月28日（1912）、ボグド・ハーンのモンゴル国への帰順を請願する文書（YTA A141-1-5:8）をジャルハンズ・ホトグトに提出した。ジャルハンズ・ホトグトは、ながくホブドのシャルスムに滞在し、ホブド辺境の民の信望が厚かった。チュルテム・ダー・ラマだけでなく、その兄のバルダンドルジももともと僧であったので、モンゴル国への帰属は、ボグド・ハーンへの宗教的帰依か、あるいはジャルハンズ・ホトグトとの個人的な関係がおおきく影響したのであろう。ボグド・ハーンに帰順したアルタイ・オリアンハイ7旗は、ホブドのドウルブド右翼盟ウネン・ゾリグト・ハン部に編入される。

その年1912年8月にモンゴル軍は、ホブド市を占領し、ボグド・ハーン政府軍を指揮するジャー・ラマ・ダンピージャンツァンは、さらに兵をシャルスムに向けて進めた。Цэдэн-Иш（2003: 78）に



図2『ドウルブド右翼盟散秩大臣公バルダンドルジ、ガルサンジャブらの七旗図』（チンゲル河周辺部分）  
共戴3年10月25日（1913）

- 147 北チンゲル河
- 148\* 古の祖先の墳墓のある場所
- 149\* オリアンハイ公バルダンドルジ旗の居所
- 150\* この河すべて耕地あり
- 151 南チンゲル河
- 152 チャンハン河
- 153\* 公の居所
- 154\* チンゲル河の僧院
- 155 ノヨン・オボー
- 156 ノゴーン湖

註：数字はTX3A（1986）に付された番号。番号の後に\*の付されているのは、他のアルタイ・オリアンハイ7旗の地図にはない記述。

よると、共戴3年(1913)夏、ボルガン河で新疆軍とモンゴル軍とのあいだで戦闘がおこった。その時すでに北京における中ロの秘密協議によって、アルタイはモンゴルから分離されるという合意ができていたので<sup>23</sup>、両政府は戦闘が拡大しないように動き、ボルガン河で緊急に休戦協議が設

た。そして、中ロ条約の締結後、1913年12月21日、新疆との間で停戦協定が結ばれる<sup>24</sup>。

インは、「モンゴル・アルタイ山脈(の分水嶺)を南下し、ガンツモド峠でボルガン河に入りにしたがって南下し、ツァーガントウング、トハンツェグ、ハラート河口にいたる」8か月の時限付きラインであった(Мөн:79)。

このような時間経過のなかにおいてみると、図2の地図にも、第1回 国家大ホラルでの報告と同様、チンゲルこそが自分たちの土地の中心であると訴えるメッセージが込められており、1913年のチンゲル河からの移動が彼らの意思ではなかったことを示している。

#### IV. アルタイ地域についての政府の立場

新疆のアルタイ地区をモンゴルの領土にしてほしいというモンゴル政府への要求は、アルタイ・オリアンハイ右翼大臣旗だけでなく、ほかのアルタイ・オリアンハイ旗、トルゴード旗、ホショード旗、ザハチン旗、カザフ旗選出の議員たちからも、国家大ホラル、小ホラルで繰り返し発言されている。ホラル=議会という「民主主義」システムの場合において、地域の人々の声は直接響く。それに呼応して、政府は、新疆アルタイ獲得の可能性について言及するようになる。

もちろん、1912年モンゴル軍によるシャルスムへの進軍にみられるような、アルタイ辺境をモンゴルの一部とみる考え方は、当時ものこっていたであろう。また、白軍のアルタイ侵入と赤軍による駆逐等を通して、ソビエトのアルタイへの影響力が増していたことも事実だ。一方で、1913年の中ロ協定、さらに1915年ロシア・中国・モンゴルの3者によって締結されたキャプタ条約では、アルタイ辺境は中国に帰属することが決まっていた。これら旧ロシア帝国と中国との条約は、1919年のモンゴル自治解消、ロシア革命と再度のモンゴル独立宣言を経て、1924年の中ソ協定ですべて無効となった。しかし、外モンゴルを中国領土の一部とする同協定第5条から演繹すると、アルタイ辺境は中国に帰属するという合意はかわらず、当時のモンゴルを拘束していたといえる。とはいえ、具体的な国境線は1913年の停戦ラインから協議されておらず、そこに可能性がのこされていた。最終的にモンゴル・中国間の国境が定まるのは、1962年12月である。

このような状況は、これまでのモンゴル史における説明では、ボグド・ハーン政権が「モンゴル人の統一国家を建設しようとした」という語り<sup>25</sup>とおなじように、モンゴル民族統一の意志と中ソ

23 1913年11月5日の中ロ条約の協議を指す。中国側は、ボルガン河を中国領とみなしていた。

24 Цэдэн-Иш (2003: 78) が、モンゴル側をトルゴード王パルタ、新疆側を9月ロシア駐シャルスム公使に着任したクジミンスキー(Михаил Николаевич Кузьминский)が代表したと書いているのは逆であろう。また、協定締結の日付が「12月8日」となっているのは、ユリウス暦による(cf. 張 1980: 293)。

25 代表的なのが、Марсаржав (2010 [1926]) であろう。ただし、第2章のタイトルが「外・内モンゴル民族

アルタイ・オリアンハイ人はなぜアルタイ山脈を越えたのか？（上村）

の思惑（ソビエトの中国国民党の評価等）による挫折という文脈で説明されがちである。しかし、史料からは、それでは語るこのできない別の様相がみえてくる。

1925年11月の第2回大ホラルで左翼大臣旗選出議員テベグトは「アルタイ・オリアンハイ7旗は、現在も中国の残虐な領主たちの支配下に抑圧され苦しんでいる。しかし、外務大臣ギワーバルジルは、彼らオリアンハイ人をこちらに移して服属させることを、中モ間で協定が締結されたのちに決定すると発言したが、実に不適切である。今日、われわれオリアンハイ人は、残虐者の圧政にこれ以上耐えられなくなっている。よって、これについて第2回国家大ホラルで明確な指針を出して決定することを強く望む」（УИХ, УБХ 2009: 103, 1925.11.11）と発言した。アルタイ・オリアンハイ選出議員エレンツェンも「西の辺境のオリアンハイ7旗はずっと以前から残虐な中国人によって弾圧されてきた。今ハルハ・モンゴルの国に開明的な政府が樹立され、その恩恵でわが7旗の民は、やっと平穏に暮らせるようになった。とはいえ、以前の住み慣れた故郷の地にある資源は、すべて外国の残虐な者たちによって利用されている。これらを、今後開明な政府の恩恵によって、自分たちが取りもどし利用できるようになることを強く希望する」（同: 132, 1925.11.13）と発言している。

このような要求に対しモンゴル人民政府は、その要求を一応認める答弁をしている。同1925年春開催された第1回小ホラル（1925.3.21）では、テベグトが「わが西アルタイの民と土地をいかにする考えか？」と質したのに対し、外務大臣ギワーバルジルは「西アルタイを平定する考えである」と答えている（УБХ 2009: 31）。また、第6回国家大ホラル（1930年4月）の外務省質疑応答では、ボグド・ハン・オール部選出議員のウルジーオチルがつぎのように質問し、外務省が答弁している。

ウルジーオチル議員「わが国のトルゴード、オリアンハイ、ザハチン、ホショードの土地に新疆の中国官憲・軍隊、中国籍のカザフ人が住んでいるので、境界識のオボーを彼らの向こう側に行って修復するのがむずかしい状況であり、実施していないとのことだが、その中国籍の者たちが占有する土地はどのくらいあるのか？また、彼らの向こうに行けないということは、故地を失うということになるのか？それとも他の手段をとるのか？」

外務省回答「これについては、アルタイ辺境のわが国の国境は、アルタイのシャルスムのある場所であるが、昔から、マンジュ・中国の侵略の時代に彼らの都市が建設され、軍隊や官憲が駐留しているので、現在のところ統一できていない。それで、モンゴル籍のカザフ人は両断されて非常に困難な状況にある。よって、中国とわが国の両国の交渉がない現在は、実現できるかはかなり疑問があるので進めていないが、最終的には、国土を失わないようにと検討している。」（УТА 11-1-215: 40）

繰り返される新疆アルタイ地域をモンゴル領にという要請に、西部辺境以外の代表者もモンゴルの領土問題として、また、分断され苦しんでいる人々の救済という観点から、アルタイ辺境の問題

---

がいっしょになって全権のモンゴル国を建設する様相であった時代」というように、まず念頭にあったのは内モンゴルであった。

に関心を強めていき、このような回答を引き出したと思われる。

一方で、チョイバルサンらがアルタイの資源、とくに金鉱に興味を示していたことを示すやりとりが、第1回小ホラル1925年(モンゴル国15年10月7日)の議事録に記録されている。

議員チョイバルサン「(アルタイ地域にある)金鉱は採掘しているのか?採掘しているのならば、どれほどの利益を得ているのか?また金鉱の作業をしているのは中国人か、モンゴル人か?」

議員ナイダンスレン「アルタイ・オリアンハイのシャルスムのこちら側にあるのか?」

議員チョイバルサン「金鉱を採掘した人にその金の一部を与えるのか?自分で掘ったものが利益を得るべきでは?」

議員バドラフ「武装した200人を追い払って金の利益を独占するべきでは?」

議員テベグト「地下資源も狩猟獣も、すべてアルタイの向こうにあり、われわれは利用することができない。中国人のみが独占的に利用している。作業員は全員中国人で、あちこち掘削してかなりの金を洗い得ている。そこにいる中国の軍隊はそれほどおおくない。ただ作業員の数が多いが、武装はしていない。得た利益をその土地の住民に分け与えるということはない。いくら7旗のオリアンハイ人が土地の資源を望んでも、武装した者200、武装しない者2千近くの者たちにどうしてそれを言うことができようか。ただ、自分の土地の権利を取りもどそうと願って、所属するホラルの議員たちに話したのである。」(УБХ 2009: 196-197)

金鉱にあからさまな興味を示すチョイバルサンらの質問に答えるアルタイ・オリアンハイ人代表テベグトは、自分たちの土地を取りもどすのにそれを利用しようとしたと考えられる。

このようなやりとりが繰り返される過程で、モンゴル政府の指導者たちの頭の中に、新疆アルタイをモンゴルの領土にする具体的なイメージが浮かんできたとしても不思議ではない。それが表れていると考えられるのが図3の地図である。印刷された地図の上にアルタイ・オリアンハイ7旗の境が引かれ、旗の名前が毛筆で書かれている。また、ツァーガンビリグ旗をのぞいた6旗の領地の真ん中には、国境線が引かれている。旗長の名前や称号から、1914年から1919年間の状況を示した地図と思われる。裏面には「元帥チョイバルサン蔵書からもってきた。1952年2月20日、ロブサンチュルテム」と説明書きがある。この地図によって、チョイバルサンは、モンゴルに帰属したアルタイ・オリアンハイ人のこれら土地への権利を示し、モンゴルが新疆アルタイを領土にすることを正当化したかったのだろう。すくなくとも、これらの土地が、アルタイ・オリアンハイ人の土地であり、したがってモンゴルの潜在的領土だと認識していたのである。後に状況が変わり、チョイバルサンは、カザフ人オスパンを支援し新疆アルタイに干渉国をつくらうとする。それは、スターリンの指示によるものであったが、モンゴルにとっても、安全保障上の利益を得るだけでなく、その国をモンゴルの影響力下に置くことも、編入することも未来のひとつとして存在した(Болд, Туяа 2011: 75)。1930年代前半のウイグル人ホジャ・ニヤズへの支援から得たものがなかった教訓もあったであろう。実際、中国側の史料では、1942年モンゴルとオスパンのあいだで結ばれた協定に、モンゴル側の要求として、オスパンが占領したチンゲル、フフトホイ(富蘊)の両県

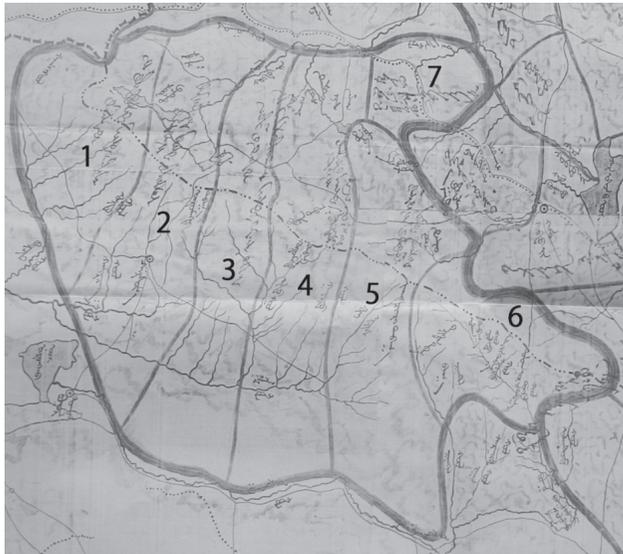


図3『ドウルブド左右翼部地図』  
(1914-1919?) (コピー・部分)  
(Гантулга2000:222; УТА:М167-118-93)

- 1 エイエテイ公トゥルバト旗  
(通称：ツァガーン(白)・ソヨン旗) \*
- 2 ソリグト公サンドンジャブ旗  
(通称：ハル(黒)・ソヨン旗) \*
- 3 大臣將軍公ナツァグドルジ旗  
(左翼散秩大臣旗)
- 4 シャル・ダー、ヨスト公バドラフ旗 (通称：フフ・モンチョグ旗) \*
- 5 サロール公ゴンボジャブ旗  
(通称：サロール旗)
- 6 ダルハン貝子ジャミヤンジャブ旗  
(右翼散秩大臣旗)
- 7 ダー・ズトゥゲルト公ツァガーンビリグ旗 (副都統(メーレン)旗)

\*を付したのがトゥバ系とされる旗  
1-7の旗は、図4の①-⑦の旗とそれぞれ対応する。

に、モンゴル軍の駐留を認めるという条項があった(張 1980: 5191)。

ただ、この地図のように旗の境界が定まっていたとは考えにくい。前出の1924年の第1回国家大ホラル報告でも「わがオリアンハイ7旗の土地にはお互いを分ける境はなく混住してきた」(YTA 266-1-1)と述べられている。隣のトルゴードやザハチンにも旗の間の境界はなかった。土地の権利を主張するには、実態とはことなるが、旗の境がはっきり引かれていた方が都合よかったであろう。

図3の底本になった地図で興味深いのは、6に引かれた国境線がオラーン峠、マシ峠、ドローンノール峠を結んで、つまり現在のバヤンウルギー県とホブド県の境に沿って引かれていることである。これは、1913年の停戦ラインよりさらに東に寄っている。現在の国境は、ボルガン河とチンゲル河をはさむモンゴル・アルタイ山脈の分水嶺で引かれている。このように、この地域の国境には、様々な解釈があった。

同じ時期にアルタイ行政区が作成した地図が、図4の『阿爾泰科布多界圖』(中央研究院近代史研究所1982: 挿圖2)である。右下に「阿爾泰行政區總務處長周宣極製」とあり、民国6年(1917)に國務院に提出された地図である(同書: 37)。これをみると、現在の新疆側の土地はほぼカザフ人の牧地となっており、国境が土地を分断しているのは、右翼大臣旗とカザフ人の牧地のみである。

上で述べたように、大・小ホラルという場で繰り返されるアルタイ・オリアンハイ人、トルゴード人、ザハチン人、カザフ人らの住民分断の解消という要請によって、新疆アルタイを「最終的には」平定するという政府の見解が顕在化された。そこに、モンゴル人を統一するというテーマは開

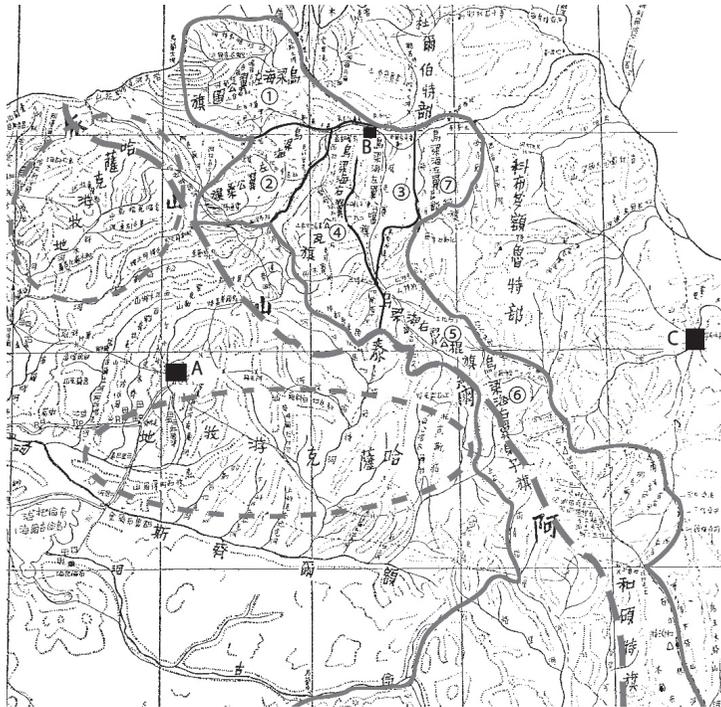


図4『阿爾泰科布多界圖』  
(1917) (中央研究院近代史研  
究所 1982: 挿圖2) 部分

- ① 左翼公トゥルバト旗
- ② 左翼公サンドンジャブ旗
- ③ 左翼公ガルサンジャブ旗
- ④ 右翼公オチルジャブ旗
- ⑤ 右翼公ゴンボジャブ旗
- ⑥ 右翼公貝子旗
- ⑦ 左翼公副都統旗

茶実線：現在の国境線

緑実線：盟境界

黄実線：旗境界

青線楕円：カザフ遊牧地

A シャルスム（承化寺）

B 現在のウルギー

C ホブド

こえてこない。むしろ、しだいに大きく唱えられるようになるのは、コミュニテルンの民族平等というテーマである。前述の少数民族評議会設置についての小ホラル決議ロシア語原案冒頭は「勤労者人民がいかなる民族であるかにかかわらず、彼らの福祉の向上を推進し、封建領主と僧侶による政治的抑圧と経済的搾取から彼らを開放する」とうたい、「少数民族の勤労者人民は、自民族の封建領主と富裕者だけでなく、より強く数の多い民族の官吏たちによる二重の抑圧にあっていた」と述べる (YTA 11-1-228)。ボグド・ハーン政権がハルハ以外のモンゴル人に帰順をうながす際も、漢・マンジュ人の圧政からの解放がうたわれたが、ここでは対象が「あらゆる民族」とより一般化されている。このことは、ホジャ・ニヤズや、その後のオスパンに対する軍事援助の理由づけにもなったと考えられる。

新疆アルタイに対する関心は、大・小ホラルでの発言における、その土地の豊かさへの言及によって、その資源に向けられたことは、すでに述べた。人民政府の新疆アルタイを獲得しようとする意思には、モンゴル人にかぎらず、カザフ人をふくめた住民の分断解消と異民族の支配からの解放、新疆アルタイの資源への関心等々がからみあっているのである。

いずれにせよ、新疆アルタイをモンゴル領にするという言質をモンゴル政府からとったアルタイ・オリアンハイ人は、それをなかなか実行せず、新疆アルタイの彼らの土地が中国籍のカザフ人や漢人によって占有されている状態が既成事実化していくのを座視している政府に対し、不満をつらせていったであろう。これも1930年の出来事にいたる理由となった。

## V. アルタイ・オリアンハイ人の帰属意識

前述したとおり、Алтанхуяг（1991）と Авирмэд（2012）のように、現在のモンゴルの研究者が当然のものとして仮定する「母国」としてのモンゴルへの帰属意識は、この当時大多数の人々になかったという点も重要である。現在のモンゴル人にとって、「母国」とは、国民国家としてのモンゴル国そのものである。しかしながら、当時のモンゴル国全体の識字率は非常に低く、とくにアルタイ・オリアンハイ7旗には、文字を知るものは3人だけだった（КБМ 1996: 198）。こうした状況で、すくなくともアンダーソン流の国民国家が形成されていたと考えるのには相当無理がある。ナショナリズムとは、本来政治的・文化的エリートたちの「語り」であり、汎モンゴリズムも同様である。それが一般にも広く共有され、単なる言説にとどまらなくなるためには、出版等のメディアが必要となる。

「エフ（母）・オロン（国）」というモンゴル語も、1930年代よりふるい文献にはみられない。モンゴル人民革命党の公文書では、1936年3月の中央委員会第2回総会決議に、日本の侵略の脅威に言及する文脈で3回使われるのが最初である（НТБ 1966）。そして、ハルハ河戦争をつうじて、ロシア語の“родина”に対応する言葉として国民に普及した。この戦争は、国民国家の生命線である国境をめぐる、国家と国家が対峙して戦った、モンゴルにとって最初で唯一の戦争であった（上村 2010: 520）。

下に引用するソラフバヤルの小ホラル幹部会報告（1930.10.28）は、当時のアルタイ・オリアンハイ人の帰属意識や人民政府とその政策に対してどのような思いを抱いていたのか、よくつたえている。ソラフバヤルは、アルタイ・オリアンハイ人が1930年最初にアルタイ山脈を越えた直後、西部辺境におけるカザフ、オリアンハイの内部事情を調査し、オリアンハイ人の声を、つぎのように記録し報告している。なお、行頭の1, 9, 10等の番号は、ソラフバヤルのつけた項目番号、①～⑦の番号は筆者による。

西の辺境へ行ったうち、この西の辺境の少数エスニック集団であるカザフ、オリアンハイの内情を取り上げてみると…

1 この西辺境のカザフ、オリアンハイの土地には、外国との定まった国境はなく…

9 党员ウルグンジャブ、ダルジャー、エルフダワー、僧ツォーホル、ダムジャイらが言うには、①「われらが土地の境はどこどの土地にあり、どんな場所で区切られているのか？あの（アルタイに）移って行った家族は、この国の中を移動したのか、それとも違うのか？境を越えて行ったのか？」というので、「境を通して越えて行った」と答えると、またウルグンジャブが言うには、②「チンゲルは、もともと昔からわれらオリアンハイの土地であるのだから、移動して行った人たちを追って会いに行こう。身分証や書類なしで直に行こう」と言うので、そのように勝手に身分証なしには境を通過することはできない道理を言うと、③「そもそも、チン

ゲルは、毎年作付けするわれらオリアンハイの重要な生活の糧の土地なのに、誰がどのように、いつ何日に、われらの土地を、誰がやったのか？いや最近移動して行った家族らは自分の土地の中を移動したのだ」などと言う上に、「カザフ人たちはわがモンゴルに所属しているのに、こっちにどうしてこないのだ。これを見ると（新疆アルタイは）われらの土地なのであろう」、④「しかし、ハルハの者たちは、いったい誰にやってしまったのか？われわれには本当にわからない」などと言った。

10「あなた方の土地に耕地はあるのか」とたずねると、⑤「われわれが耕作するのはチンゲルだ。他に土地はない。これからそこに耕作しに行こう」と言い、さらに⑥「ゲルや家畜は境を越えて移動してしまい、ここにひとりで自分の土地に取りのこされた人たちがいるので、この者たちが兄弟や父母と（会いに）身分証なしで自分の家に行ってよいのかどうか？もしだめならどうという理由でだめなのか？もしこの者たちに身分証を与えることになったら、金を取るのだらう。何にでも金を取ってばかりいる」と言った。…

14くだんの2人が言うには、⑦「あなた方のハルハ人たちの規則は、毎日変わってばかりいる。われわれは、何に従ったらよいのだろうか？いったいどうにも従うことができなくなっている」と言った。(YTA11-1-230)

ソラフバヤルは、①で中国との国境がはっきりしていないこと、②、③で新疆側の土地も自分たちの土地であり自由に往来ができると考えていること、③、⑤でチンゲルが彼らの生活に必要な農地であること、③、④でその土地が知らないうちにハルハ人がほかの者に譲渡していたという不満、⑥で自分の家に帰るのに身分証明書が必要でそれに料金がかかると言う不条理感、⑦で人民政府の方針が始終変わることにオリアンハイ人たちの不信をつたえる。前に述べたように、アルタイ・オリアンハイの人々は、辮髪を切ったハルハ人たちを「モホル＝角なし」と呼んで、革命と人民政府を自分たちのものではなく、ハルハ人から押しつけられたものと考えていた。

そもそも、アルタイ・オリアンハイ右翼大臣旗のモンゴル国への帰順は、安定したものではなかった。民国側の記述からふたつ例をあげると、1914年領主バルダンドルジは、モンゴル国から民国政府に帰順している（張 1980: 300）。また、その弟であるチュルテム・ダー・ラマも、1917年新疆におもむき、モンゴル国の税金が重いと不満を訴え、帰順したい意思をつたえている（同書：747）。

通過するのに身分証が必要な国境ができつつあったことが、アルタイ山脈を越える理由のひとつとなったこともうかがえる。それまで簡単にできていた移動が、国境によってできなくなるというおそれは、新疆に移動する決断をせまったであろう。

また、1927年旧暦8月5日の小ホルル幹部会報告（YTA 11-1-119: 42）では「チンゲル河に少しばかりの穀物をまいたが、作柄はそれほどよくない」とあることから、少なくとも1927年まで春アルタイ山脈を越えてチンゲル河で耕作を行っていたことがわかる。インタビューでドノロブ氏は「わが右翼大臣旗の半分はチンゲルにいた。半分はここにおいて、穀物や野菜をアルタイに、チンゲ

アルタイ・オリアンハイ人はなぜアルタイ山脈を越えたのか？（上村）

ルで作っていた。秋に行って収穫し、春に種をまいていた」と話している。

つまり、国境は、彼らにとって外部から唐突にもちこまれたもので、彼らの生活にさらにおおきな障害となりつつあったのである。

## おわりに

本論は、1930年モンゴル西部にいたアルタイ・オリアンハイ人が集団でアルタイ山脈を越えた出来事を中心に、歴史の動態を、彼らの視点からみてきた。アルタイ・オリアンハイの人々、とくに右翼大臣旗の置かれた状況には、長期にわたる歴史的な文脈が積みかさなっていた。それらをたどり、彼らの視点からみれば、1930年の出来事は、アルタイ山脈の向こう側にある彼らの故地、あるいは本拠地にもどつたにすぎない。もちろん、そこにはさまざまな要因や意図がからみあっているのだが、この解釈をいちばんに強調することなしに、彼らがアルタイ山脈を越えたことを理解することはできない。新疆アルタイは、彼らの生活にとって重要な土地であり、人民政府もそれをモンゴル領にする意思を表明していた。ほかの地域の人々は、アルタイ・オリアンハイ人がアルタイ山脈を越えて中国側に移動したのを、その固有の文脈から切り離し、人民政府に対する逃散という抵抗の形式としてうけとめた。それによって、中国に隣接する地方からの大規模な「集団逃亡」の連鎖が誘発されたのである。

1930年が、社会主義国民国家建設の前段階にあったことも重要である。1924年ボグド・ハーンが死去し、1939年のハルハ河戦争を経て、翌1940年の第10回党大会では、革命的国家建設が一応の完成をみたとして、つぎの社会主義国家建設が目標になる（上村2010:526）。このように、ボグド・ハーン政権以降の国家システムに、国民国家の国家システムが上書きされようとしていた時代なのである。

ボグド・ハーン政権は、モンゴル系の人々を引きいれ帰順させること（*дагаар орох*）につとめた。土地が獲得できない場合でも、人の帰属が優先された。1913年のアルタイ・オリアンハイ右翼大臣旗の移動も、このような原則で説明することができよう。また、シェルシ等のカザフ旗のように、モンゴル系でない者も願えば帰順が許された。言いかえれば、帰属は個人あるいは集団の意思にもとづき選択することができ、その一方で、政府にとって、帰属の変更は裏切りであった。

このような、いわば清朝から受け継がれた、あるいは牧畜民的な属人主義帰属原則に対して、国民国家では、その主権のおよぶ国境で限られた地理的領域に住む住民が、国民として、学校や徴兵などの諸制度によって再定義されてゆく。これらの制度が導入されようとしていたことは、この西部辺境の社会に動揺を与えた。そして、流言を生み、それがアルタイ山脈を越える原因のひとつとなった。民族平等の思想も、少数民族評議会を設置する小ホラル決議でみたとおりに、アルタイ・オリアンハイ人とカザフ人に同等の権利を与えるように作用し、前者の政府への不満につながった。

「逃亡」を裏切りと見なす政府の見方は、「反革命」として存続し、その後も「母国への反逆」という名で継承される。その反面、新疆アルタイをモンゴルの潜在的「領土」とみて、そこにある資

源に注目する見方も顕在化してくる。人民政府のなかの新疆アルタイをモンゴル領にしたいという意思には、二つの国に分かれて苦しむアルタイの人民を救済しなければならないという倫理感や領土拡張願望、新疆アルタイの資源を手にいれたいという野心等がからみあっていた。

1940年バヤンウルギー県は、清朝からの対カザフ人対策を継承し、カザフ人の「安插」の地として設立された。チョイバルサンは、アルタイ・オリアンハイ人が新疆アルタイの土地への「権利」をもつと認識していたが、1940年代実際に新疆アルタイを獲得しようとしたとき手を組んだのは、オスパンを指導者とするカザフ人だった。バヤンウルギー県は、新疆アルタイへ出撃するカザフ人の基地となったのである。19世紀からアルタイ・オリアンハイ人のアルタイ山脈東側にある牧地に流入しはじめたカザフ人は、バヤンウルギー県設置の1940年には県人口の6割、2007年には8割を占めるようになり（Султан, Зулькафиль 2010: 158）、アルタイ・オリアンハイ人はこの県で圧倒的少数者になった。

以上述べてきたように、西部辺境におけるこの時代の歴史のダイナミクスは、モンゴル系民族の地域を統合しようとする意図、つまり汎ナショナリズムや、国民国家の存在を前提とするような語りによっては説明できない。また、政治史にも還元できない。地域の住民の視点から、その場所と時間集約された歴史的な文脈をたどっていくことによって、その文脈の連続と切断のなかで、様々なアクターの多層的で多面的な意図や解釈が交錯しながら、歴史が展開してきたことが見えてくるのである。

## 参考文献

略号 УТА: Улсын Төв Архив; SH: Studia Historica; SE: Studia Ethnographica

### 史料（中国語）

『科布多事宜』嘉慶4年原修，道光年間增補：『科布多政務総冊』（1970）新修方志叢刊24，台北学生書局。

『清代職官年表』錢實甫編：『清代職官年表』（1980）中華書局。

『清史稿』1928年完成，趙爾巽等編：<https://zh.wikisource.org/wiki/清史稿>。

『中俄界記』宣統3年，鄒代鈞著：『近現代中国边疆界務資料』（2007）第10冊，蝠池書院出版有限公司。

### 文献

Авирмэд, Д. (2012) *Дүрвэх хөдөлгөөн ба улсыг аюулаас хамгаалах байгууллага -1930-1934 он-*. УБ.

Алтанхуяг, А., Амарсайхан, У., Банзрагч, Б. Баттулга, Ж., Думбурай, А., Цэрэнбалжир, Д. (1991) *Түмний хараанаас мултраагүй*. УБ.

Алтанхуяг, А. (1991) Дүрвэгсдийн хөдөлгөөн, In: Алтанхуяг et al.: 84-109.

Бабков, И.Ф. (1912) *Воспоминания о моей службе в Западной Сибири 1856-1875 гг.* С.Петербург. (<http://nblib.library.kz/elib/Sait/Редкие%20книги/И.Ф.Бабков/I.Bobkov.html> 2015.5.10 閲覧)

Бадамхатан, С. (1973) БНМАУ-ын үндэсний ба угсаатны хөгжлийн асуудал. SH, T.9-F.14: 15-21.

Бадамхатан, С.(ed.) (1982) *Орчин цагийн угсаатны явц ба социалист ахуй*. SE, T.8-F.1.

白劍光 (2010) 「是办事大臣还是帮办大臣? —《清德宗实录》关于锡恒职衔记载的几处错」『西部蒙古论坛』2010-2: 41-45.

Баттулга, Ж. (1991) Алтайн хязгаараа хамгаалсан нь. In: Алтанхуяг et al.: 134-141.

Benson, L. and Svanberg, I. (1998) *China's Last Nomads: The History and Culture of China's Kazaks*. M.E. Sharpe, Inc.

БНМАУТ (1969) *БНМАУ-ын Түүх* III. УБ.

Болд, Б., Туяа, Б. (2011) *Оспан хэн байв- Монгол баримт юу өгүүлэв*. УБ.

Болдбаатар, Ч. (2009) БНМАУ-ын Бага хурлын дэргэдэх байгууллагууд. *Acta Historica Mongolici*, 10-33: 252-258.

Гантулга, Ц. (2000) *Алтайн урианхайчууд*. УБ.

ヘディン (1984) 『シルクロード (下)』(文庫版), 岩波書店.

上村明 (2010) 「国土・国境・国民：戦争の想像力—「祖国」防衛戦争としてのハルハ河戦争—」 In: Imanishi, J. and Husel, B. (eds.), *The Battle of Khalkhyn Gol (Nomonham Incident) in the World History -Knowing the Past and Talking of the Future-*. Fukyosha, Tokyo: 519-530.

- Камимүра, А. (2013) Алтайн урианхайчууд: Монголын социалист угсаатны зүйн онолд, *Mongolica* 46: 103-110.
- Камимүра, А. (2015a) Алтайн урианхайчууд эх орноосоо дүрвэсэн үү, эх нутагтаа буцсан уу? -1930 онд Алтайн урианхайчууд Алтай давсан нь. In: Сүхбаатар, На., Бямбажав Х.(eds.), *Bibliotheca Oiratca* LI: 98-110.
- Камимүра, А. (2015b) Алтай урианхайн долоон хошууны газрын зургийн тухай. In: Равдан, Э. et. al (eds.), *Монголын газрын зураг, газрын нэр судлал*, УБ.: 100-120.
- КБМ (1996) *Коминтерн ба Монгол /Баримтын эмхэтгэл/*. УБ.
- 李毓澍 (1991) 『蒙事論叢』 里仁書局, 台北.
- Магсаржав, Н. (2010 [1926]) *Монгол улсын шинэ түүх*. Monumenta Historica Instituti Historiae Academiae Scientiarum Mongolici: 7-1. УБ.
- 松原正毅 (2011) 『カザフ遊牧民の移動：アルタイ山脈からトルコへ：1934-1953』 平凡社.
- Минис, А., Сарнай, А. (1960) *БНМАУ Баян-Өлгий аймгийн казах ард түмний түүхээс*. УБ.
- НТБ (1966) *Монгол ардын хувьсгалт намын түүхэнд холбогдох баримт бичгүүд*. УБ.
- 佐口透 (1986) 『新疆民族史研究』 吉川弘文館.
- СТАТИСТИК (1976) *БНМАУ-ын ардын боловсрол, соёл, урлаг (Статистикийн эмхэтгэл)*. УБ.
- Султан, Т., Зулькафиль, М. (eds.) (2010) *Баян-Өлгий аймгийн нэвтэрхий толь*. УБ.
- ТХЗА (1986) *Монгол улсын аймаг, хязгаар, харуулын нутгийн түүхэн хилийн зургийн Альбом*. УБ.
- УБХ (2009) *БНМАУ-ын анхдугаар бага хурлын хуралдаан*. Monumenta Historica Mongolorum 5 (1-3), УБ.
- УИХ, УБХ (2009) *Улсын хоёрдугаар их хурал, Улсын нэг, хоёр, гуравдугаар бага хурал*. УБ.
- УИХ (2010) *БНМАУ-ын дөрөвдүгээр их хурал*, Monumenta Historica Mongolorum 6(1). УБ.
- ХГД (1999) *Халхын голын дайн: Нэгэн жарны тэртээд (Баримт бичгийн эмхэтгэл)*. УБ.
- Цэдэн-Иш, Б. (2003) *БНМАУ-ын хил үүсч тогтсон түүхэн тойм*. УБ.
- 吐娜 (1990) 「棍噶扎拉参与額魯特蒙古」『内蒙古师范大学学报』1990-3: 392-398.
- Zhamtsarano, Ts. (1979 [1934]) *Ethnography and Geography of the Darkhat and Other Mongolian Minorities, with a Mongolian-English Glossary by John R. Krueger*. The Mongolia Society Special Papers, Issue Eight. The Mongolia Society.
- 張大軍 (1980) 『新疆風暴七十年』 蘭溪出版社, 台北.
- 张荣, 王希隆 (2002) 「清末科塔借地之争论」『中国边疆史地研究』12-1 (2002) : 24-32.
- 中央研究院近代史研究所 (編) (1982 [1959]) 『中國近代史資料彙編—中俄關係史料：外蒙古 中華民國六年至八年』 中央研究院近代史研究所, 台北.

[付記] 本稿中で使用した図表のカラー画像は日本内陸アジア史学会 HP (URL : <http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/nak/backnumber/nak31kam.html>) において公開している。

(かみむら あきら 東京外国語大学外国語学部)